

吉田甚吉：薬業経済論の構想

Jinkichi Yoshida : An Idea of Drug Economics.

1. 序

新制薬大に薬業経済論と云う新科目が設けられてから数年を経るが、その全貌が如何にあるべきかに関して、意見が発表されたのを余り聞かない。思うに此の科目は、新設されたと云うものの、元々非重要科目であり、旁々講義時数も少くてその全貌に触れる余裕が殆どない故でもあろう。然し乍らともかくも薬業経済論と称する限り、以下論述する如き体系と内容を有すべきものと愚考する。大方の御叱正を得れば幸いである。

2. 薬業経済論の対象

薬業経済論とは、薬業の経済学的研究である。薬業とは医薬品を目的とする経済行為が業として営まれる場合を云う。茲に経済行為とは、財の獲得準備を目的とする行為で、之を大別すれば生産と交換の二つとなる。又業として営まれるとは、或る経済行為が、単に一回限り、若しくは、断片的に為されるに非ずして、継続的、組織的に行われ、それによつて人が生活の資乃至所得を得ている事を云う。而して業として営む為めには、設備、資材、労働力などが一定の目的と計画の下に有機的に結び付けられる事を要する。斯様な有機体を経営或は經營体と称する。かくて薬業とは、生活の資乃至所得獲得の目的を以て、医薬品の生産或は交換を、継続的・組織的に営む經營体であると云う事が出来る。經營体なる概念は超歴史的なものであるが、資本主義体制の下にあつては、それは、原則として貨幣的余剰、即ち利潤獲得を直接目的とする企業なる形態を探る。依つて、現下の薬業は、医薬品の生産或は交換を営む企業がその主体であると云える。

医薬品の生産は、原始的生産と加工生産に大別出来る。原始的生産は、更に採取生産と育成生産に分れる。何れも生薬の生産に関するもので、前者は自然に存在する動物、植物、鉱物の中より医薬品に適するものを採取する事であり、後者は、薬草園を經營して、薬草を得るが如きを云う。加工生産には、化学的生産・生物学的生産・物理学的生産の三種がある。化学的生産は、合成医薬品の生産に見られる如く、生産過程に化学的過程を含むものであり、生物学的生産は、血清、ワクチンの生産の如く、生体の生理作用を利用して生産するものであり。最後に物理学的生産は所謂製剤を云う。医薬品の加工を業とするものが医薬品工業で、現代医薬品の生産に主たる役割を果している事は云う迄もない。

医薬品の交換を業として営むものが医薬品商業である。医薬品商業は、医薬品の生産者と消費者との間に立つて、医薬品需給の人的、場所的、時間的調節作用たる機能を果しているもので、仲介さるべき生産者と消費者の態様によつて、その形態も一律でない。一般に商業を大別して、卸売と小売とに分るのであるが、医薬品商業の場合、小売業に薬局の如き特殊なものを含む。

以上よりして、薬業経済論の研究対象は、薬業であるが、薬業は、医薬品原始的生産業、医薬品工業、医薬品商業の三分野を含むものであるから、之等が凡て研究対象とされねばならない訳である。

3. 薬業経済論の研究方法

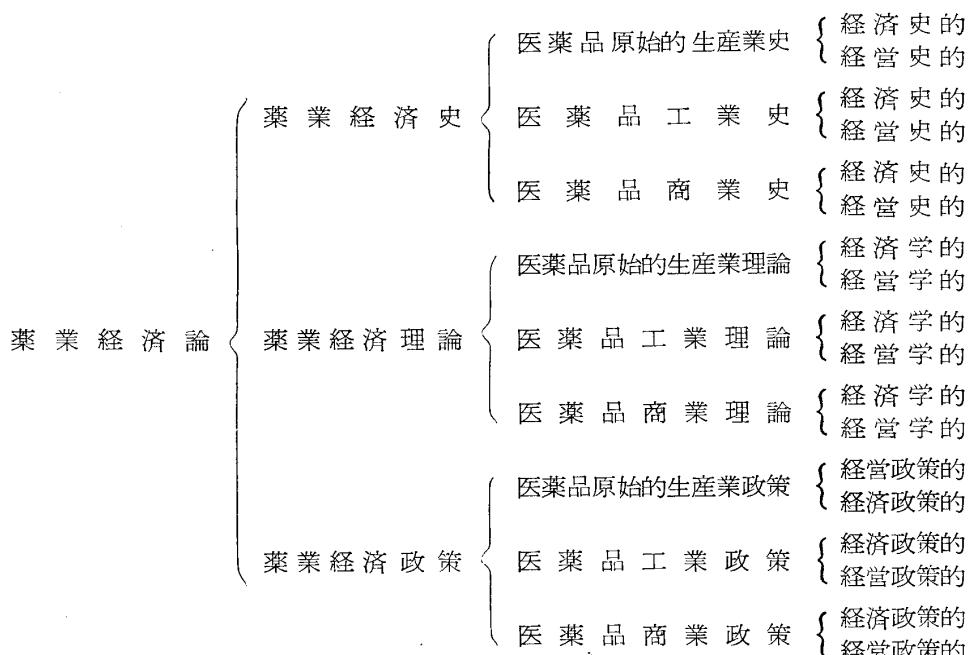
薬業経済論の対象は薬業であるが、経験対象としての薬業は種々なる側面を持つ。例えば技術的な面、法律

的な面の如きであつて、それに応じて夫々を研究対象とする研究乃至学問が成立する。薬業経済論は薬業の一面である経済的側面を研究するものである。換言すれば、その認識対象は薬業経済である。

経済的研究には周知の通り三つの分野がある。一は経済史、二は経済理論、三は経済政策である。従つて薬業経済論に於いても此の三部門を有しなければならない。即ち薬業経済の歴史的発展を研究分野とする薬業経済史、現にある経済の事実を認識しその法則性を研究する薬業経済理論、かくあるべき薬業経済、即ち理想としての薬業経済を想定し、それに到達すべき方策を研究すべき薬業経済政策の凡てを含まなければならない。

経済的研究には、更に別の観点から、経済学（狭義）と経営学とが成立する。経済学は総合経済的観点よりするもので、多数個別経済の経済活動が交錯複合する結果として生ずる経済現象の法則性を研究する。之に対して経営学は、夫々の個別経済が、その目的を達すべく、主体の意思に統合されて為す経済活動上の諸現象乃至その目的合理性を研究し、個別経済の存立発展の条件を明にする。勿論此の両者は、等しく経済的側面を対象としているのであるから、研究領域の明確でない点が多い。特殊乃至応用経済学たる薬業経済論に於いても此の両立場より研究が為さるべきである。従つて経済的研究としては、例えば、医薬品の需要供給、価格等を問題にし、経営学的研究としては、医薬品企業の形態、立地、費用、仕入、販売の如きが問題となりその特殊性が明にされねばならない。

以上述べ来つた処よりすれば薬業経済論の体系は、次の如きものとなろう。



4. 薬業経済論の内容

斯様な体系が理論的に与えられるとして、その夫々に盛らるべき内容は果して何如なるものであろうか。薬業と云う特殊分野なる為めに、そして又之に対する科学的研究の未発達なるが故に、資料は時代的にも、地域的にも不充分且つ未整理たるを免れず、従つて内容は貧弱となるざるを得ない。かくて薬業経済論は資料的に限定せられて、その一般性を或る程度喪失し、少く共当分寒質的に日本薬業経済論で満足しなければならない。

次て筆者がその内容として考えているものを項目的に列挙すれば次の如くである。

第一篇 薬業経済史

第一章 第一期（古代、中世、近世）

第一節 総 説

漢方医術の支配と、その用薬としての唐薬の重要性。

唐薬の代用薬としての和薬とその奨励。

第二節 医薬品原始的生産業

和薬の採取、育成、本草学との関連、人蔵栽培の隆盛。

第三節 医薬品工業

第四節 医薬品商業

輸入薬の流通経路、和薬の流通経路、和薬改会所、株仲間商取引の方法。

第五節 売 薬

起源、発達、売薬方法、富山売薬。

第二章 第二期（明治維新より第一次世界大戦発生前迄）

第一節 総 説

封建制度の崩壊と資本主義制度の確立。

漢方医術の後退と西洋医術の普及に伴う洋薬の需要増加とその影響。

第二節 医薬品工業

明治政府の保護政策と現存大メーカーの萌芽。

第三節 医薬品商業

洋薬輸入と洋薬問屋の勃興

第四節 売薬業

濫売問題の発生と徳盛会。

第三章 第三期（第一次大戦発生より第二次大戦終了迄）

第一節 戦争と薬業との関係

第二節 医薬品工業

第一次大戦と医薬品工業、準戦時、第二次大戦と医薬品工業。

第三節 医薬品商業

医薬品貿易、戦時配給統制。

第二篇 薬業経済理論

第一章 医薬品原始的生産業

第一節 生薬の生産理論。

第二節 生薬生産の経営形態。

第二章 医薬品工業

第一節 医薬品（工業製品としての）の性質。

第二節 医薬品工業生産の性質。

- 第三節 医薬品工業の現勢とその構造.
- 第四節 医薬品工業経営の一般性と特殊性.
- 第五節 医薬品工業企業費用論.
規模及操業度と費用. 最適規模. 原価計算.
- 第六節 医薬品工業企業販売論.
市場調査. 販売計画. 売価政策. 広告宣伝.

第三章 医薬品商業

- 第一節 医薬品市場と医薬品価格.
- 第二節 医薬品貿易
- 第三節 医薬品の流通組織.
- 第四節 医薬品商業経営の一般性と特殊性.
- 第五節 医薬品商業企業の形態.
- 第六節 医薬品卸売経営.
- 第七節 医薬品小売経営. 特に薬局経営.

第三篇 薬業経済政策

- 第一章 医学並に医療及社会保険制度の発展と薬業.
 - 第二章 国民経済と薬業.
 - 第三章 医薬品工業政策.
 - 第一節 合理化問題と量産問題.
 - 第二節 医薬分業と医薬品工業経営.
 - 第三節 外国メーカーとの関係を巡る諸問題.
 - 第四章 医薬品商業政策.
 - 第一節 医薬品流通組織の合理化問題.
 - 第二節 医薬分業と薬局経営.
 - 第三節 濫売問題とその対策. 公正競争. 再販売価格維持契約等.
 - 第四節 商業企業の組織化
 - 第五章 薬業経営の理念.
-